

人生を拓く

69

吉田孝志さん(69)
秀美さん(67)
西町2

(先月号からの続き)

秀美さんは、戦前に開拓団として中国へ渡った山形善之助さん(92歳没)と由美さん(82歳没)の4人兄弟の末っ子として中国で生まれました。父は農業機械の設計・技術師だったため戦後もなかなか帰国させてもらえませんでした。生活は裕福でしたが、母は周りの貧しい子どもたちに服や食べ物などを何でも分け与えていました。秀美さんが一回しか着ていないお気に入りの洋服を、気が付くと他の子が着ていたことも。17歳の時、再教育という名目で親元から離れ、山奥の農村地帯に集団で連れて行かれました。自給自足のような生活で、食事を作る燃料もなく、本当に苦労したといえます。「兄が当局に何度も直訴してくれ、外国人の私は返されたの」と振り返ります。1973(昭和48)年、日中国交回復第一便の帰国者として家族で日本に帰国。最初は祖父母のいる剣淵に行きましたが、「日本語は話せないが仕事を探している」という記事が新聞に載ると、自身も樺太の引揚者として苦労したという人が、東川の自分の会社で働かないかと訪ねてきました。やがて両親と東川へ移住し、学生服専門の縫製会社に勤めました。



ちょうどその頃、同じ記事を読んでいた孝志さんは、日本語を話せない秀美さんの力になりたいと家を訪ねました。秀美さんが日本語を学べるよう、通信教育を受けられないか学校に相談したり、あちこち問い合わせました。どこからも理解を得られませんでした。やむなく孝志さんが日常生活を通して言葉ではなく音で日本語を教え始めました。言葉でなく音のお付き合いから始まり、孝志さん25歳、秀美さん23歳の時に結婚。その後、息子1人、孫2人に恵まれています。秀美さんは、中国にいた時は日本人として疎外され、日本に来てからは中国人と言われ指をさされたこともありましたが、言葉が通じない苦労はありましたが、縫製技術の腕が評価され、やがて役職に就き、41年間勤務。日本語は少しずつ覚え、話せるようになったのは帰国してから10年ほど経った頃。町が招待した中国人の通訳を依頼されることもあり、その頃には指さす人もいなくなりました。

今では留学生にとって「日本のお母さん」的存在の秀美さん。以前、留学生として訪れた60代の女性が中国の中学校の同窓生だと知り、その現況を聞いて感激したそうです。「色々あったけど、今はこれで良いんですか、と思うくらい幸せです」と口にします。そばで静かに秀美さんの話を聞いている孝志さんに視線を向け、「この人は本当に優しい人なんです」と、ひとこと。

俳句

麻雀の誘いかけてる松の内
町医者の語りやさしき冬日かな
キリマンジャロの最後のピース冬銀河
短日に夕食支度せかされる
三代を生きる晴れ着や初鏡
うたごえ喫茶ラの音弾む春近し
酒抱いて冬道急ぐ日暮れかな
胸の闇まるでスライム雪合戦
年の瀬や背中さする手ぶこつな手
甥姪と最後に母へとお年玉
結晶の一片ごとの冬光る
隠しても純情ぼろり皮ジャンパー
寂しいと言われないように巻くマフラー
赤い血のお赤かれや去年今年
令和まで図太く生きて根雪踏む

横田 則子
杉山 りつ
高瀬 潤
三島 智
若田 郁
佐々木 りえ
本田 咲
こばやし 星来
保科 なほ
斎藤 夕桜
山内 みゆ
小林 ろば
八田 昌代
石澤 清宏
杉山 ひろのり

